

2016年第56回日本リンパ網内系学会

将来構想実施委員会（以下、将来委員会と略する）のまとめ、及び理事会での議論を含めてのご報告

出席者（敬称略）：吉野正（委員長）、近藤英生（副委員長）、青木智広、岩城憲子、大西紘二、岡谷健史、岡本晃直、加藤省一、河本啓介、菊地智樹、高柳奈津子、竹内真衣、佐々木裕哉、
欠席者（敬称略）：三浦勝浩（メールによるご提案を事前にいただいた）

将来委員会の委員のみなさま、ご多用な中出席くださり、積極的意見提示ありがとうございました。なんだか本学会の将来に希望が持てる感じがしました。以下まとめです。

1. 事前にご意見いただいたものについて、ご説明いただき、議論しました。事前意見等は、三浦先生、青木先生、河本先生、佐々木先生から。
2. 将来委員会の目的は、学会の活性化にあり、具体的には参加者の増加、学会員の増加にある。
3. 海外学会（ASH）への援助をいただきたい。そのような演題に選ばれることは、海外学会への出席を上司等へ申請する強い後押しになる。その制度が演題提出の動機づけにもなる。とりわけ、大学では学会出席は比較的容易であるが、病院で臨床（これは病理もそうではないかと個人的に思います）をしていると、困難さを実感する。費用の問題があるが、これは学会奨励賞、理事長賞といったものに金銭的副賞が出ているが、それは、名誉を与えるものであり（履歴書にも書ける）副賞は必要ないのではないか。
4. 論文の作成といった視点での教育的な講演などをしていただきたい。また、学会に抄録を提出した場合、それについての意見、評価、これはよりよい発表とするための助言がいただけると、非常によい。
5. リンパ腫についての理解を一般の方々にしていただくために、学会主導による公開講座やホームページに現在の知見を披露するようにしたらどうか。また、共通 IC（IC の雛形）をホームページに掲載し、便を図る。
6. 臨床検査技師、放射線技師、看護師といった職種のひとびとが演題提出できるような場を提供する。
7. 本学会が関わる（あるいは主導する）臨床研究を推進すべきである。基礎と臨床が集うというのが本学会の特徴であり、臨床、病理、他の基礎系学者、統計学者などが共同作業しやすいのではないか。

理事会で、上記について報告しました。その結果以下のような反応、指摘がなされました。

1. 学会 **ASH** への援助について、賛成という方もありましたが、費用をどうするのか、詳細をつめるべきである。特に、学会の財政は「楽」ではない、という指摘がありました。
2. **Co-medical** についての学会参加については、時間的制約もあり、特段の意見はありませんでした。否定的な意見はなかったというのが重要な点であると個人的には重要で、前向きに考えていただけるのではないかと思います。
3. 論文作成についての講演、抄録への助言等についても具体的な議論をすることはできませんでした。これも2と同様、否定的な意見が出なかったことを重視したいと思います。ホームページの充実や公開講座についても報告するに留まっています。時間の関係で、致し方ない面もあります。本まとめを委員に提示し、合意が得られれば理事長以下執行部の先生方に送付するので、継続した審議となるように努めます。
4. 臨床研究については、濾胞性リンパ腫についての研究を推進したいということが提示され、ある意味、すでに同じような考え方を進めている現状があることを知りました。

以上の経過により、以下のことを学会に要望したいと思います。（理事会等々での議論や助言などを入れた、委員長個人の個人的見解も入っていることをご理解ご容赦ください）

1. **ASH** への学会出席について：現在、本学会ではすべてがポスター発表となっていて、優れたものと評価されているものが **oral presentation** されています。この方法が今後とも継続されるかどうか不明ですが、そうなった場合、優秀演題の中から **ASH** への援助を選定する。すべてを理事等が聞くことは難しいが、今回だと3つのパートがあるので、その座長が（たとえば）1題ずつ選定する。**ASH** に出すことを希望しないものもあるかと思うので、抄録提出時、その希望があるかどうかを○で囲むようにしておく。
2. 費用の問題：現在奨励賞には20万円、理事長賞に10万円出されている。後者は **JCEH** への論文であり、その副賞を削除することには異論が（かなり）あるので、前者の中から15万円を出し、ひとり5万円3演題とする。（これだと、今回の学会の3パートと一致します。また、学会負担は軽減します。）問題あるいは課題は、優秀演題は1演題以外すべて大学からのものであった。援助については、優秀演題となった時点で **honor** なので、「賞」ではないので、同一発表者は1回まで、大学もバランスを考えて、同じ施設に集中しないものとする。

3. ASH に採択されるかどうか、という問題がある。したがって、ASH の誌上発表を超えるものになったときに援助金を出す。
4. ある理事から、製薬会社等に働きかけ、その社名を入れた、〇〇ASH 参加プロジェクト、といったものができるかどうか検討したらどうかというご提案をいただいた。
5. Co-medical の参加については、この報告書&要望書が委員間の賛同が得られた場合、理事長以下に配布し、議論してもらう。論文作成についての講演、公開講座、ホームページも同様。
6. 抄録に対する、「指導」「評価」「意見」については、1 と同様に希望の有無を抄録提出時に希望するかどうかを選んでもらう。
7. 臨床研究については、それと軌を一にするものがないとされる予定なので、それをより推進する。

吉野 正